

インド歴史学会に出席して

昨年十月末、印度政府よりの招待で西ベンガルにあるタゴール翁創設のサンチニケータン大学、ビシユバ・プハラテイ研究所に赴任の爲出発せられた本学春日井真也教授よりこの程、「サンチニケータン便り」と題するたよりがもたらされた。以下はその中、特にインド歴史学会において発表された新資料の一部である。(編輯部記)

春日井真也

一、プシャミトラ・シユンガは仏教徒の迫害者ではない

スリ・ハリ・キシヨレ・プラサド

プシャミトラ・シユンガは大変な仏教徒の迫害者であつたと大多数の学者は信じている。かれらの論証は、デイヴイヤーグダーナ (Divyavadana) マンジュスリ ムルカルパ (Manjusri - Mulkalpa) とターラナータの仏教史と含まれた諸資料に基づいている。しかしそれらの注意深い研究によると、プシャミトラ・シユンガは、デイヴィヤヤーグダーナやターラナータのプシャミトラ及び信頼の置かれているマンジュスリ、ムルカルパのゴミムキヤ (Gomimu-

khya) と明らかに同一人でありえない。

(一) この關係について注目すべき要点は、

プシャミトラ・シユンガは、プラーナ (Purana)

Harsacharita. Meghrikagnimitram 及び Ayodhya

の碑文のうちにおよびては必ず “Senani” または

“Senapati” の称号をもつて言及されてゐるといふこ

とである。かれはどんな帝号をも僭称しなかつたらし

いが、Senapati とか Senani とかという言葉で知られ

あるいは知られることを好んでいた、これ故に、それ

は、それらによつて容易に認めることのできるプシャ

ミトラ・シユンガの顯著な渾名であつたのである。しかしデイヴィヤーヴダーナにもターラナータの仏教史にもかれはその称号をもつて言及されていない。これ故に、デイヴィヤーグダーナ及びターラナータのプシヤミトラが、將軍のプシヤミトラ・シユンガであつたかどうか極めて疑わしい。

(二) 更に、ターラナータ史の翻譯文は、プシヤミトラに仏教徒の迫害者としての烙印を押しはけない。そこでは迫害は外道たち (Tirthikas) の手で行われている。

(三) Dr. Bagchi は、ヤヴナ王デーミトリアス (Yavana King Demetrius) とヤクシヤクリミセナ (Yaksha-krimisena) とを同一に取扱つているが、かれの見解は、同じ關係に於いてデイヴィヤーグダーナのうちの意外な新事実によつて弱められている。かれによるとギリシヤ王デーミトリアスはプシヤミトラ・シユンガの仇敵であつたのであるが、ヤヴナもまたかれの友人であつたし、かれは、かれの権力のために殺されては

インド歴史学会に出席して

いなかつた。とデイヴィヤーグダーナのうちの次に述べるような章句は示唆している。

Psyamitrasya rajñah priṣṭatah yakso mahāna
pramāṇe yūyam, tasyān ubhāvāt as rājā na
prathanyate.

それ故に、このギリシヤ王は、一見勢力のある王であつたと思われる。またプシヤミトラ・シユンガ時代にデーミトリアスは、恐らくパンジャーブ (Punjab) に於いては勢力のある唯一の王であつた。それ故に、もしそうであるとすると、二つの相容れない見解—すなわちプシヤミトラ・シユンガの仇敵 Yavana (Demetrius?) と同時にかれの友人という—を如何に一致させるべきであろうか。

(四) Dr. Jayaswal は、諸王の年代に基づいて視ミムキヤとプシヤミトラ・シユンガとを同一視しているが、信頼し難い。何となれば、マンジュスリ、ムルカルバの作者の年代の考え方はひどく混同されているからである。そこにはアショーカ (Aśoka) 王は、マウリヤ王

朝のチャンドラグプタ (Chandragupta) やビンドウ
 サーラ (Bindusara) よりも以前に、しかもナンダ諸
 王よりも前にすら言及されている。アジャータサト
 ル (Ajatasattu) は二回も言及されている。

ゴミムキヤは、バクチ博士の述べているように、軍隊の
 指揮者という意味に基づいて、プシャミトラ・シユンガの
 称号であると考えられるかもしれない。しかしこれに対し
 て軍隊の指揮者というのは、必ずしもゴミムキヤのあり
 得る唯一の意味ではないということが指示された。また他
 の詩句に *Gomisand* として言及されている。ゴミムキヤは
 プシャミトラを表わすのであるが、その意味は不明であり
Gomi は *Jackal* であり、また在俗仏教信者の意味であ
 る。とバクチ博士は認めている。

二、カニシカの年代

スリ・バラメシュワリ・ラル・グプタ

Eastern U. P. Behar, Orissa の位置で発見され、
Sisupalgarh, Pataliputra, Sahet-Mahet の発掘で発見さ

れた古銭資料に基づいて、これらの地方に於けるクシャ
 ナの領土拡張は、西暦二世紀以前ではありえない。と、こ
 の論文で指摘しておいた。シナ・チベットの伝説はサケ
 ター (*Saketa*) 及びパータリプトラとともにカニシカの戦
 争を記録している。そこで、カニシカの年代は西暦二世紀
 以前ではありえない。この結論は、タキシラ (*Taxila*) 及
 びベグラム (*Begram*) の発掘によつて確証されている。
 更に、それは *Van Wijk* の典籍に示唆されている。かれ
 は、カニシカ紀元の最初の有りうべき期年によつて *Zeda*
 及び *Und* 刻文の天文学上の材料に基づいて、その年代を
 西暦一三四年と算定している。

三、サタヴハナ王朝の没落

シュリ・ビー・エス・ハヌマントハ・ラウ

サタヴハナ (*Satavahana*) 王朝の没落は、仏教とバラ
 モン教との激烈な闘争によつて惹き起された。サタヴハナ
 諸王は、バラモン教及びカースト制度の擁護者であつた。
 一般大衆の精神的要求に報いることによつて、仏教の発展

を阻止したプラーナ (Purana) の宗教は、かれの保護のもとに発展した。

しかし西暦二世紀の後半に、ナーガルジュナ (Nagarjuna 龍樹) の大乘仏教は、仏教を大衆の具体的な宗教に変形した。Yagna Sri と同一視される、ナーガルジュナと同時代のサタヴハナは、公然と仏教を保護した。サドヴハナ (Sadvahana) 及びそのアーチャルヤ (Acharya) のために今一度、仏教は通俗的となり、バラモン教の強敵となつた。

バラモン教徒はその発展を憤慨し、またカターサリトサガラ (Kathasaritthagara) 及び玄奘 (Hiben Tsiang) の記述は、ナーガルジュナとその保護者がバラモン教の反動的犠牲となつたことを指摘している。

その結果として生じた混乱は、サタヴハナの首都の近くに便宜上駐在していたイクシユヅクの人々 (Ikshvakus) を激励した。イクシユヅク・サンタムラ (Ikshvaku Santanula) は、好戦的なバラモン教を復興するために軍隊を率いて、サタヴハナ王朝を倒した。碑文の記述によると

インド歴史学会に出席して

サンタムラは、シヴァ教徒の傾向を有するベータ (Veda) 信仰の支持者であつた。かれの後継者たちも亦バラモン教を信奉していた。バラモン教徒たちがシュリバルグダ (Sriparvata) 僧院を略取したという玄奘の記述は、これらの事件に言及してゐるのかもしれない。それ故に、バラモン教復興の好戦的形勢が、サタヴハナ王朝を放逐し、イクシユヅク王朝を起したことは明らかである。

四、ナガルジュナコンダの四つの歴史的な彫刻

エム・ラマ・ラオ博士

ナガルジュナコンダ (Nagarjuna Konda) の発掘中に得られた夥しい石板彫刻の中には、宗教的性格の彫刻が多数あるが、歴史的に重要なものは少ない。二つの石板は、バラモン教との関係を絶つ王を描いており、その一つの混成彫刻は同じ出来事とその結果として仏教に帰依する王を描写している。この王はイクシユヅク・シュリ・グイラ・プリサダッタ (Ikshvaku Sri Vira Purisadatta) と同一視されねばならない。またナガルジュナコンダで手に入つ

たこの王の統治第十八年の日附のある四つの碑文は、かれの勝利と長寿に対する贈物を含んで居るのである。同じ場所のもう一つの彫刻は、象から滑り落ちる王を表わす戦いの場面を示している。この王も亦プリアサダツタと同一人であり、その戦いの場面は、かれがバラモン教を公然と非難した結果起つたと思われる暴動の抑圧を現わしている。王に対する個人的な危険が、かれの安全と勝利のための贈物を作らせたにちがいない。それ故に、これらの四つの彫刻は歴史的に重要である。

五、古代カシユミラの人々

―かれらの人種的親近性―

スニル・チャンドラ・ライ博士

タゴール (Tagore) は、かれの有名な詩の中で、インドを異民族に属する人々が互に遭遇し混合した巡礼の場所と比較している。インドで真実であることは、亜大陸の最北端に位する国、カシユミラ (Kashira) に於いても同じく真実である。この論文の著者は、歴史的言語学的資料に基

づいて、主として古代カシユミラの人々の人種的親近性を取扱う。

六、モヘンジョダロとベータダの文化

シユリ・ランブラサド・マジユムダル

モヘンジョダロ (Mohenjodaro) 文化は、ベータダ (Veda) 文化と類似しており、その後期の部分を代表していることをここで証明しようとした。時代と地域に限定されているモヘンジョダロ文化は、ベータダ文化と類似した (或いは類似していない) 特徴をすべて保持していることを期待することはできないといわれてきたが、やはり多くの共通的特徴がある。

(一) ベータダの 'Ayas' は、Yaska によると、金を意味するものかもしれない。またもしもそれが鉄を意味するものならば、鉄がモヘンジョダロに存在したことはありえないことではない。しかしそれは土地の中で錆びて腐ってしまったのである。更に恐らく町は鉄具をもつて掘られて建てられていた。

(二) ベーダは農村と都市の兩文化を代表している。農村の特徴は、もしも沢山あるならばむしろ古代を示唆するであろう。

(三) *Sinadeva* などのようなベーダの言葉は、*Phallus* 崇拜を表示しているのかもしれない。モヘンジョダロの三頭像は、*Siva*, *Rudra*, *Trisira T. Viswarupa* を表現しているのかもしれない。それらのすべてはベーダ的である。*Maheswar* は *Paninian Vedanga* の起源である。*Sarpas* や混成語の起源の多くは *Rsis* や *Aryans* である。そしてそれらは人種やより優れた民族よりもより一層文化を表示するものである。

(四) 'go' すなわち牝牛は、サンスクリットでは男性または女性として用いられ、モヘンジョダロの牡牛と比較することができる。

(五) 年代学の問題はともかく容易に西紀前三〇〇〇年以前にさかのぼることができる。

(六) モヘンジョダロの *Zebra* (斑馬) に似た像は、ベーダ文学の中に多く言及されている馬を意味するのかもしれない。

インド歴史学会に出席して

しれない。

人種の学説は全く科学的ではない。家長制と女家長制との論及は、*Vivasvan* などのさういふ性質をもっている *Veda* の中では珍らしいことではない。埋葬された遺骨を保存することは *Grhyasutra* を示す。 *Vedanga* の著者として有名な *Yaska*, *Gobhila* などのような名は、それぞれ *Sat. Br.* や *Sama Ye.* や *Vamsa Br.* の教師のリストの初めの辺りに見出すことができる。それ故に極めて古いものである。 *polyandry*, *Niyoga* 及びそのような他のものは、むしろベーダの古代を示すものである。モヘンジョダロは *Lalita Vistara* に言及されている六四の文字から *'Sindhulipi'* あるいはそれに似た性質のものを表現し得る。

七、ベンガールの初期の碑文とサンスクリット

文学に於ける都市生活と地方生活

シユリ・タポナト・チャクラヴルテイ

ベンガールの初期の碑文と古代のサンسكريット文学は古代ベンガールの都市生活と地方生活についての僅かの知識を与えてくれる。現在のように古代ベンガールに於いても都市生活と地方生活との間には奇妙な対照を見出すことができる。古代ベンガールの村落のうちには生活の原始的な素朴さと思想に關しては保守主義を見出すことができ。古代ベンガールの都市や地方都市には異つた絵のような光景—富裕と奢侈と近代主義の美観—を見出すことができる。

八、カリダーサのラグフンサに於けるフナの葬

式の風習に關して

ブツダ・ブラカシユ博士

ラグ (Ragu) の勇猛なことはフナ (Huna) の婦人たちの赤い頬に表現されている。とラグフンサ (Yuvansa

[N. 68] の中でカリダサ (Kalidasa) は述べている。この詩文に關する注釈の中でマリナタ (Malinatha) は次のように述べている。フナの婦人たちの頬は、かれらの良

人たちが死んだために、悲哀のあまりむち打つて赤くなつたのである、と。しかし、これは臆測以上の何ものでもない。シナの典籍によると、モンゴリアの Tu-Kiue は、男が死んだときには何時でも血が涙とともに流れ落ちるのを見ることができた程、ナイフで顔を深く切ることに慣れていたことを我々は知る。(Stanislas Julien, Documents sur les Tonkue, J. A. (1869) P. 332) この習慣は亦フナやヘフタリテ (Hephthalites) の中でも一般的であつた。カリダーサは前述のラグフンサの詩文の中でそれに言及したのである。

九、ロトハル最古の史跡 (サウラシユサトラに於ける)

(インダス年代記の基点)

シユリ・ケー・エヌ・サストリ

一九五四年から一九五五年にかけてこの遺跡でインド考古学局の手で行われた発掘は、ハラツパ (Harappa) 文化の三様相の關連を明らかにした。それらは、下部より上部にそれぞれ「前衛」「衛」「後衛」の形をとつている。と

きどき、西暦紀元前二〇〇〇年頃あるいはそれ以後の泥煉瓦の重々しい城壁は洪水あるいは外敵に対する防禦の手段として造られたことを、ロトハルの堤の横断面は示している。これは防禦の相である。ハラツパ人の占有していたこの堤は数フィト下に抜がつており、この相は発掘者には、「前衛相」と呼ばれてゐる。この相の起源は西暦紀元前二五〇〇年にさかのぼる。これらの年代は、ニューデリーの国立博物館で一九五五年九月に開かれた考古学展覧会に展示されたシュリ・S・R・ラオの「文化系列図表」から取つたものである。

ロトハルはラングブラ (Rangpur) や

ルパル (Rupan) よりも古。

「インド考古学」"Indian Archaeology" (一九五四—五五) に発表された簡単な報告によると、ハラツパ人の占有の起源は、ラングブラもルパルもともに西暦紀元前二〇〇〇年頃に帰しうる。それ故にロトハルは前述の二つの遺跡よりも約五〇〇年古いことになる。ハラツパ人が最初に

インド歴史学会に出席して

ロトハルを占有した年代は、西紀前二五〇〇年であり、インダス文明の年代は必然的にそれより古いにちがいない。Dr. Wheeler の見解によると、円熟したハラツパでもモンジョダロでも、西紀前二五〇〇年頃である。もしもかれの年代を受容れるならば、それは円熟したハラツイ文化が三つの場所、すなわちハラツパ・モンジョダロ・ロトハルで同時に出現したことを意味するであろう。しかしロトハルはハラツパの文化の非常に頽廢した面を代表してゐる。この形勢は、ハラツパやモンジョダロに示されてゐるように、インダス文明の「後期」よりも数世紀のちに現われている。これは、インダス文明の初期に対して西紀前四〇〇〇年という修正された年代について私の見解を強めた。

一九五四—五五年の間に考古学局の手でラングブルに於いて発掘された光沢のある赤い陶器の資料についてはこの論文でも論じた。この光沢のある赤い陶器が、ハラツパのH共同墓地の光沢のある赤い陶器とよく似ていることを指摘した。結果として、この陶器製造業は、ハラツパ人の仕

事ではなく、これより早い文化が衰えつつあつたとき、その舞台に現われた或る異邦人の仕事であつた。

一・二は一九五三年 Walkair に於ける第十六回大会記事

(Proceedings of the Sixteenth Session: Walkair) 〆近刊のうさからとりました。三一九までは一九五五年第一入回大会記事 (List of Rapers and Sammaries) のうさからとりました。

追記

一九五六年一月十九日あさ五時四五分、バクチ博士は急逝された。心臓マヒ。享年五八才。その葬儀の模様は中外日報に詳しく報じましたから御覽下りなす。

博士の著者欧文のもの一四(うち未刊一)冊、論文六〇を数える。その主なものは左記の通りなす。

- (1) Le Canon Bouddhique en Chine, les traducteurs et les traductions, Tome I lii—436. 1927.
- (2) Deux Lexiques Sanskrit—Chinois Fan yu tsaling de Liyen et Fan yu tsien tseu wen de Yit-sing, Tome Iiv—336. 1929.

- (3) Deux Lexiques Sanskrit—Chinois... (Etude critique des Deux Lexiques), Tome I, 1937 (336—540)
- (4) Le Canon Bouddhique en Chine, les traducteurs et les traductions, Tome II 433—740.
- (5) Index du Canon Bouddhique en Chine (Sous Presse)
- (6) Pre—Aryan and Pre—Davidian in India PP. 216 Calcutta 1929,
- (7) India and China 1927.
- (8) Kaulajana—niraya and other minor texts of the School of Matsyendranatha. Calcutta Sanskrit Series No. II 1934.
- (9) Introduction to the Adhyatma—Ramayana. C. S. S. No. II
- (10) Buddhist Dohas, Calcutta University Journal of Letters XXV II.
- (11) Materials for a critical edition of the old Bengali Caryapadas, C. U. J. L. XXX. PP. 150.
- (12) Studies in the Tantras (Part I) Calcutta Univ. 1937.
- (13) Dohakosa. 1935
- (14) India and Central Asia 1955. (National Council of Education, Bengal)